

## 原点を思う 奥田亡羊

新歌集『昔話』むかごとである。

- ・衰へてなかば地に伏す枯力ヤを抱き起こして根元より刈る
- ・大虹のあらはれやすき丘に住むびしばしと弧は音もなく張る
- ・耳鳴りに苦しめられて目を開ける 嘩、耳のない雪が降つてゐる

東日本大震災から三年が経つ。震災以後の歌壇を振り返つて思うのは、震災が現代短歌の足元を照らしたということだ。自然詠や家族詠や社会詠、言つてみれば短歌のありきたりなテーマ、テーマというよりも柱とも言つべきものがぐらぐら揺れている。短歌の原点がむき出しになつたような感じだ。

たとえば去年出版された三原由起子の『ふるさとは赤』という歌集がある。三原は福島原発事故による全町避難が続く浪江町出身の歌人だ。荒削りな一面もあるが、言わざにはいられない思ひがストレートに伝わつて来る歌集である。

・ふるさとを失いつつあるわれが今歌わなければ誰が歌うのか  
・半年で背丈に繋る雑草や荒らした豚の足跡も 家

・ふるさとを遠く離れて父母と闇を歩みぬ 蟻を追つて

いずれも「故郷喪失」をうたつている。歌のまつすぐさに私はまず新鮮な感動を見るのだが、思い出の中のふるさと放射能に汚染された現実のふるさと、虚実の逆転に引き裂かれる思いは前衛短歌の原点を思い起こさせてくれる。またふるさとを歌うといふことは、「われ」を問うことであり、また「自然」を問うこと

に他ならない。三原の歌には現代短歌が近代から引き継いだ大きなテーマがごろんと横たわつてゐるのだ。

人間と自然との関係を徹底的にうたつてゐるのは佐藤通雅の最

震災以後、漠然と私は自然が歌いにくくなつたと感じていた。放射能に汚染された自然を、これまでのようには歌えないと思つていたのだ。しかし、佐藤通雅の歌集を読んで、自分の浅はかさを恥ずかしく思つた。佐藤は自然に対する懷疑もうたえ、信頼もうたう。自然に対する畏れもやさしさもうたう。あるときは自然と一体化し、あるときは人間のスケールを超えて自然と響き合う。自然詠にこそ現代短歌の最前線があつたのだ。

社会詠、思想詠に関しては大島史洋の『近藤芳美論』に教えられることが多かつた。大島は『新しき短歌の規定』に込められた近藤芳美の「使命感」や「理想」を論じ、「今の自分にそういう切羽詰まつた心があるのかどうか」と自問する。もちろん近藤批判ではない。近藤芳美の遠さを逆に自分自身への 現代短歌への問い合わせとして引き寄せてゐるのが大島の『近藤芳美論』である。ある機会に三原由起子が「原発反対」というだけでお前は左翼かと言われる」と嘆いてゐるのを聞いた。

近藤芳美の『埃吹く街』に次の歌がある。

・世をあげし思想の中にまもり来て今こそ戦争を憎む心よ  
原発反対 戦争反対の問題ではない。近藤芳美の「理想」が確かにある迫力をもつて私に迫つて来る。  
新しさとはいかに本質的でありますかということだ。